様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ４ 月 ２１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２１００７

研究課題名（和文）都市コミュニティをつくる貨幣：沖縄と大阪の模合（頼母子講）に関する研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study on ROSCAs in Urban Life

研究代表者
平野　美佐（野元美佐）（Hirano-Nomoto, Misa）

京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授

研究者番号：４０４０２３８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円、（間接経費）　　870,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、沖縄県那覇市周辺地域の頼母子講である模合（模合）について文化人類学的フィールドワークを行い、現在主流の「親睦模合」が、都市の流動的な人間関係をつなぎ止め、金融以外の面でも「助け合い」組織として機能していることを明らかにした。また大阪市大正区の調査では、沖縄系の人びとがもちこんだ模合は「タノモシ」として、大阪人を巻き込んで沖縄系コミュニティの核となっていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：ROSCAs (Rotating Savings and Credit Associations) are called "Moai" in Okinawa. I examine the Moai in Naha, the prefectural capital of Okinawa, to clarify the features and functions of Moai created for strengthening the bonds of friendship, or "social Moai." The Okinawan people use the money of Moai to make their fluid relations solid. And the members of Moai help each other, that is the social Moai function as the association for mutual aid. In Taisyo-ward of Osaka, Okinawan immigrants brought their Moai and they use it to gather people into the community.

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 文化人類学

キーワード： 文化人類学　沖縄　コミュニティ　貨幣　都市

1．研究開始当初の背景

私は 1993 年以降、アフリカ、カメルーン共和国の首都において都市人類学的研究を行い、なかでもトンチンとよばれる頼母子講の研究を重点的に続けてきた。頼母子講とは、ある一定規模の集団が集まり、全員がある金額を持ち寄り、その合計を一人あるいは数人に貸し与えることを順番に繰り返す金融活動である。銀行を活用できない人びとにとって、まとまった金額を手にできるメリットがある。しかしカメルーンでは、銀行が身近な都市部でも頼母子講が盛んであった。平等化の圧力が強いアフリカでは、貨幣を得ることも貯めることも利己的な行為である。しかし頼母子講に貨幣を預ければ、個人的で利己的な稼ぎが集団の相互扶助の資金へと意味を変える。よって頼母子講に貨幣を預けることは「善」であり、頼母子講のために貨幣を稼ぐことすら肯定される（野元 2004；2005）。このように、「なぜ頼母子講か」の回答は、それをとりまく社会環境や文化の問題が大きく影響している。

日本でも古くから行われていた頼母子講（無尽）は、大規模なものは相互銀行（のち普通銀行）に姿と変え、小規模なものは消滅した。例外が沖縄県で、県内各地で模合（もあい）と呼ばれる頼母子講が行われている。沖縄では成人の約６割から８割が、１つ、あるいは複数の模合に参加しており、都市部であれ、若者であれ、富裕層であれ行っている。カメルーンよりはるかに経済的に豊かで、金融機関も発達した現在の沖縄では、模合の多くは金融目的ではなく、親睦目的のものである。同窓生や親族、友人、同郷者、ときには企業人同士が、たいてい月に一度集まり模合の集会を開く。沖縄の都市社会では、アトム化した孤独な都会人は見えてこない。

このように、沖縄で大きな存在感をもつ模合であるが、学術的な研究は少なく、とくに文化人類学的フィールドワークに基づき行われた本格的な研究は、宮古島の村落で調査を行った大本（1978）のもの以外、ほとんどみられない。また、都市における「親睦模合」についての文化人類学的研究もほとんどない。よって、本研究では、ひとびとの模合という実践をミクロな調査から詳細なデータを収集し、模合がどのように那覇の都市社会で人びとの関係を結び、いかに「コミュニティ」を形成しているかを明らかにしたいと考えた。

また沖縄の模合は、沖縄だけでなく、沖縄系の人びとによって、全国各地、さらには世界各地にちらばっている。そのようなコミュニティの１つが、大阪市大正区である。4 人に１人が沖縄系で「リトルオキナワ」ともいわれる大阪市大正区では、沖縄系の人びとを中心に模合が行われている。そこでは、模合はどのような役割を担っているのであろうか。また、その模合はどのような人びとを結びつけているのだろうか。沖縄と同様に、大正区の模合についても詳しい調査、とくに文化人類学的調査は行われてこなかった。

このような問題意識と研究背景から、沖縄と大阪の模合の実態とその役割を、文化人類学的なフィールドワークにより明らかにするのが本研究の役割であると考えた。

大本憲夫　1978　「宮古島における模合集団」『社会人類学年報』4，pp.207-222。
野元美佐　2004　「貨幣の意味を変える貯蓄法」『文化人類学研究』69（3)、pp.353-372。
野元美佐　2005　『アフリカ都市の民族誌』、明石書店。

2．研究の目的

本研究の目的について、以下のように２つにわけて述べる。

(1)本研究の目的の １ つは、沖縄のとくに那覇市周辺地域で模合に関するフィールドワークを行い、なぜ沖縄の人びとは日本において例外的に模合を維持・発展することに成功しているのか、そして、どのように模合が人間を結びつけコミュニティを形成しているのかを明らかにすることである。模合を通して、端的にいえば貨幣を通して、人間がつながるのはカメルーンと同じだとしても、なぜ貨幣を媒介として使うのかは、沖縄社会の文脈から求めなくてはならない。つまり、模合を成り立たせるなんらかの貨幣観と人間関係のあり方、そしてそれに基づいた貨幣実践を明らかにしなければならない。

しかし本研究では、安易に「沖縄の独自性」に説明を求めることを避ける。なぜならそれは、「沖縄に模合が存続し続けているのは、そこが沖縄だからだ」というトートロジーになりかねないからである。違いがあるならそれを出発点とし、その違いはどのように生まれ、どのように現在も再生産されているのかを、人びとが具体的に実践しているミクロな現場から明らかにすべきである。それによってのみ、模合を成り立たせている社会の在り方、コミュニティの在り方を明らかできる。

(2) また、沖縄の模合がほかの地域や人にどのように受け入れられ、その地域に貢献しているのかを具体的に考察する。1920 年代から多くの沖縄系の人びとを集め、現在も沖縄からやって来る人が多い大阪市大正区で調査を行い、沖縄系の人びとがもちこんだ模合が大阪大正区でどのように根付き、どのように変容しているのか、また沖縄出身者以外の人びとをどのように巻き込み、地域に根付いているのかを明らかにする。それにより、日本の他地域における模合の応用力を明らかにし、都市コミュニティ形成、再生にどのように具体的に貢献できるのかを明らかにできる。

このように本研究は、沖縄で広く行われているにも関わらず本格的な学術研究が少ない模合の現代性について明らかにし、沖縄社会研究のなかで本格的に着手されてこなかった空白を埋めることにより、新しいダイナ

ミックな沖縄社会像を提示する。
また、模合という貨幣活動を詳細にみることで、貨幣と人間との現代的関わりを明らかにする。貨幣が人を結びつける模合が、沖縄でいかに可能となっているのかを明らかにすれば、貨幣経済化は個人主義を強め、人の連帯を弱めるとされた従来の貨幣観とは逆の、人をつなぐもう一つの貨幣の可能性とその条件を提示できる。それは、貨幣論、そして経済人類学の分野にも新たな貢献ができると考える。

３．研究の方法
研究方法は､以下の４つの手法を採用した。
(1)文献資料調査：沖縄の模合について書かれた文献を、文化人類学的研究以外についてもできうる限り収集し、読み込みを行った。また、現在週１回、『琉球新報』に連載されている「ザ・モアイ」という記事も遡って読み、現代の模合について幅広い情報を得た。沖縄の模合の歴史については、沖縄の民族誌や沖縄県の各市町村史を調べた。また、模合を研究するうえで欠かせない沖縄の文化や社会、一般的な歴史についても、学術論文、学術書、市町村史などで調べを行った。大正区については、これまで行われてきた調査報告などについて調査をした。文献調査によって、本研究の基礎的な部分を補強することができた。
（2）参与観察：那覇市周辺地域、また比較のために訪れた宮古島市、大阪市大正区において、模合集会での参与観察を行った。多種多様な模合があるため、メンバー構成や集合原理が多様なものに参加した。同級生模合、同業者模合、近隣模合など、さまざまな模合の集会にでるように心がけ、参与観察では、そこで取り交わされる貨幣、会話、飲食物などを記録し、時間の流れなども追った。１度きりの参加もあれば､10 回以上にわたって参与観察しているものもある。また、模合集会以外の場で行われるイベントにも参加し、人間関係についてなどを直接観察することができた。
（3）聞き取り調査：模合集会の場、あるいはそれ以外の場で、模合参加者に対して聞き取りを行った。内容は模合歴、模合への思い、メンバーとの人間関係などであり、模合を軸にしたライフヒストリーである。また、模合をやっていない人に対しても、なぜやめたのか、なぜやらないのかを聞き取りした。
また、老年層の方々には、かつての模合のあり方、模合の経験、模合についての考えを聞き取った。これにより、模合の現在までの形や、かつての模合のあり方が明らかになった。
また、上記のようなフォーマルな聞き取りだけでなく、普通の会話のなかから、模合に関するさまざまな「本音」を聞くことができた。
（4）アンケート調査：アンケート用紙を作り、模合参加者や、それ以外の方々に、模合についてのアンケートを行った。その内容は、参加している模合とその種類、模合の使い道、模合に参加している理由などである。
このように、質的、量的、両面から調査を行うことで、模合に対してさまざまな角度からアプローチすることができた。

４．研究成果
研究成果は、まず沖縄と大正区の２つにわけて論じ、最後に統合して論じる。
（1）まず、沖縄の模合の変遷について述べる。沖縄で模合のような仕組みがいつ頃からあったのかは明らかではないが、文献等によれば、少なくとも 18 世紀にはすでに活発であったとされる。その頃は、模合ではなく、「ユーレー（グヮー）」「ムエー（グヮー)」などと呼ばれるのが一般的であった。そして模合は、金銭だけでなく、米模合や人足模合など貨幣以外でも行われていた（そのほうが歴史が古い)。金銭が庶民にも回るようになると、模合は庶民が金銭を融通し合う「助け合い」、沖縄でいうところの「ゆいまーる」として、金融機関が利用できない多くの人びとの唯一の金融として県内津々浦々に組織されていった。そのような模合を私は「扶助模合」と名付ける。扶助模合が盛んになる一方で、20 世紀はじめごろには、「金融模合」と呼ばれる「金儲け」､「金目的」の模合も増えていく。高額になりがちな金融模合は、持ち逃げによる「模合崩れ」などの事件が当時の新聞記事となっており、それのあたりの事情を垣間見ることができる。しかし、20 世紀半ばあたりから、沖縄社会が豊かになるにつれて「親睦模合」が増える。先にも述べたように、助け合いでもなく、金銭のためでもなく、仲間と定期的に会う（飲食する）ための親睦模合である。つまり､「ただ、毎月飲み会をしようといっても人が集まらないから｣､模合という金銭のやりとりの義務により、強制的に集まって親睦をする、というものである。これが現在の沖縄では圧倒的に多い。しかしわかってきたのは、今でも「扶助模合」も「金融模合」もそれなりに存在し、親睦模合と合わせて３つが、今でも沖縄社会では行われているということである。もちろん、この３つはそれぞれはっきりと区別できるものではない。１つの模合が、人によっては「金融模合」であったり「親睦模合」であったりする。同じ人がこのうち２つ、３つの模合に携わることもある。つまり、模合はこのように時代と社会に合わせて創意工夫されながら発展し、さまざまなタイプが人びとの必要によって生き延びてきたのである。
そして、日本全国で廃れてしまった頼母子講が、模合として沖縄だけで今も活発である理由は、沖縄だけが、模合という仕組みに、このような親睦形態を接合できたからなのだと考える。社会が豊かになっても、また金融機関が整備されても、模合がなくならなか

ったのは、模合の「カネを集める」という仕組みを「人を集める」仕組みに上手く変換したことこそが、沖縄の人びとの「発明」であり、模合が存続している理由の１つなのである。

さて、本研究の焦点である親睦模合は、上述したように、貨幣のやり取りを通じて友情や信頼をつくり、定期的に会うことで絆を深めていくものである。そのグループは、元同級生であったり、職場の仲間であったり、仕事関係者であったり、異業種の人の集まりであったりする。人びとは、毎月 1 つか 2 つ、多い人は 10 近くも参加し、それぞれの模合のメンバーとなり、小さなコミュニティを作り出している。そして明らかになったのは、親睦模合といいながら、彼らは模合集会でつきあうだけでなく、困ったことがあれば相談し、手助けするグループにもなることである。苦しい自営業者のメンバーに仕事を回したり、引越の手が必要なメンバーを手伝ったり、選挙に出馬するメンバーをさまざまな形で応援したりなど、さまざまな「ゆいまーる」が親睦模合のなかで行われているのである。つまり、親睦模合仲間は、その場限りの飲み友達ではなく、助け合い仲間なのであり、親睦模合は実は、都市の「扶助模合」という側面もあるのである。ここに、沖縄の都市コミュニティ形成における、模合の貢献を具体的に提示できたと考える。

そして、このような模合文化は、親から子へと継承される。子供は、親が模合に出かける姿を日常的に見て育つ。父親や母親につれられて模合に行く経験を持つ子も多い。子供たちは、いつか大人になれば模合をするものだと考え、実際にそれを楽しみにしている子供も多い。模合文化は徐々に失われるという説もあるが、20 代で行っていない若者たちも、30 代 40 代になれば始めることもある。親から子への文化の再生産がある限り、模合は継続されていくと考えている。

（2）大阪市大正区での調査では、大正区の沖縄系の人びとの間で行われている模合について考察した。しかし、大正区では「模合」ではなく、「頼母子講」から転じた「タノモシ」と呼ばれる。大正区における沖縄系の移民の歴史は１世紀にもなることから、彼らが故郷から模合（当時はユーレー、ムエー）を持ち込んだ際、当時、大阪で用いられていた「タノモシ」という言葉が用いられたのだと考える。また、大阪では、沖縄系の人びとがタノモシの伝統を引き継いでいるのは確かであるが、そこには少なからず大阪人が参加していることが多い。沖縄系の人びとは、自分たちで固まっているわけではなく、大阪人と日々付き合い、一緒に学校に通い、働き、結婚する人も少なくない。そうすると、模合にも必然的に、大阪系の親族はもちろん、職場、学校、沖縄舞踊などで知り合った大正区の大阪人（あるいは他の関西人）が参加することになる。多くの大阪人は、沖縄系の人びとに誘われてはみたものの、すでにタノモシを知らず、参加しながら覚えていくことになる。そして、模合を繰り返しながら、メンバー同士の絆を深めていく。

しかし一方で、大阪人が「親睦の意味をわかっていない」（沖縄出身女性 50 代）こともある。模合集会の場にお金を持ってくるだけで、飲食をしない人もいるという。彼らは「親睦模合」が理解できず、たんなる貯金手段として、つまりある種の「金融模合」として利用しているのかもしれない。

また大正区は、沖縄県人会連合会という沖縄系の人びとの団体の本部が存在する。大正区だけでなく、関西一円の沖縄系の人びとを体育会や新年会などのイベントを通して、一同に集まる機会を作り出しているのは、この連合会である。そして連合会のメンバーの一部は、模合を介して親睦、連帯を深めている。ここでは、貨幣により親睦を深め、信用を創り出し、ひいてはコミュニティを形成するという、沖縄の模合が正しく継承されている。ここにも、連合会の沖縄系の人びとと付き合いの深い関西人も混ざっている。

このように、大正区の模合である「タノモシ」は、沖縄系の枠を超えてコミュニティが形成されていることもわかった。

（3）まとめ

このように、那覇市周辺地域と大阪市大正区での模合の調査・研究を通して、人びとが模合を通して付き合いを深め、助け合い、コミュニティを形成していることが実証できた。これらの模合（タノモシ）は閉じられたものではなく、メンバーが替わったり、新しくメンバーが増えるなど流動的でもある。つまり、閉じられて固定的なものではなく、開かれて流動的なものである。これは、都市という場の特徴なのかもしれない。しかし、都市という、ともすれば人間関係が結びにくい場所において、模合を行うことで、少なくとも一定期間、人間関係は固定され、さらにはよくあることだが、長い付き合いとなっていくのである。

本研究のように、模合という活動を通じて人がどのように都市においてコミュニティを形成していることを具体的に明らかにした文化人類学的研究はほとんどない。沖縄研究のみならず、都市研究や社会関係資本に関する議論にも新たな知見を加えることができる。まだ、この 3 年間の研究成果はまとめきったとはいえず、まだまだ分析も深める余地がある。今後も、データの分析を進め、この研究の成果を学術論文として発信していくとともに、フィールドである沖縄や大阪大正区での研究成果披露なども、積極的に行っていきたいと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計２件）
(1)平野（野元）美佐、「沖縄の都市社会における親睦模合とその役割：アフリカの頼母子講との比較から」、沖縄文化協会 2013 年度公開研究発表会、平成 2013 年 7 月 14 日、沖縄県立芸術大学
(2)平野（野元）美佐、「沖縄における模合の文化人類学的研究：那覇の都市生活と親睦模合」、第 40 回日本生活学会研究発表大会、平成 2013 年 6 月 2 日、神奈川大学

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
平野（野元） 美佐（HIRANO-NOMOTO MISA）
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
研究者番号：４０４０２３８３

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：